

# 花菖蒲の園芸改良品種分類表をまとめました

品種登録係 清水 弘

## 【分類の必要性】

花菖蒲の系統は 1963 年、富野耕治先生によりそれらの成立由来を中心として熊本系（肥後系）、東京系（江戸系）、伊勢系の 3 つに分けられた。この分類方式は観賞価値と共に歴史・文化的価値をも包含するため、花菖蒲の園芸的価値を大いに高める結果となった。その後、長井古種や米国生まれの品種が加わり、更に賑やかになった。我国の高度成長期に造成された花菖蒲園には、数百～千種を越す花菖蒲品種が植栽され、園に立てられた看板ではこれら 5 系統が紹介されることとなった。さらに最近では、野生の自然変異種やロシアでの育種品種も加わり、遂に本会報の実生新花紹介コーナーでは、自生地から採取したという浸透交雑種らしき個体まで紹介されるに至っている。

他方、園芸観賞の立場と異なり、研究材料としてのハナショウブが近年、注目されている。科学分析機器の発達により遺伝子レベルでの品種比較が手取り早く出来るようになった為、ハナショウブの系統分類を試みる事例も多い。育種と異なり研究材料としてハナショウブを取り扱う場合には、結果の再現性が求められるために、同一名称の品種は全て同一親株からの増殖株でなければならず、苗の増殖や販売におけるモラルが研究者側からは求められている。

このような社会的背景に対して協会としての考え方を「花菖蒲の園芸改良品種の分類」として、次頁にまとめた。以下はその際の留意点である。

- ① 基本的には富野先生の分類方法を踏襲する。
- ② 現在の花菖蒲園で看板説明されている分類と矛盾がないようにする。
- ③ 「戦前品種群」と「戦後品種群」とに分ける。第二次世界大戦前は各地域が独立して系統内交配を進め、それぞれ特徴ある系統（品種群）が形成された。戦後は個人育種家を中心となり系統間交配が行われた。富野先生はそれらを西田型、平尾型、伊藤型等に位置づけた。
- ④ 「外国系」を設定した。米国以外でも育種が行われるようになったので、「米国系」との表現は不適切となった。

- ⑤ 新たに「種内交配種」を設定した。

昨今、手間の掛かる系統選抜を経ない新品種が増えた結果、従来系統に収まらない中間型が多くなり、それらを一括する必要があった。

- ⑥ 「種間交配種」を設定した。

我国ではキショウブやカキツバタとの交配種が、カナダではイ・バーシカラーとの交配種が育成され、第二、第三世代も生まれている。残る課題として、野生種であるノハナショウブと栽培品種との相互交雑により生じる中間型品種をどう扱うかという問題点がある。これに関しては既に、会報第 37 号 42 頁に野生種関連の 3 系統の分類案を小生より提示した。『長井古種花菖蒲図録』にもこの分類案が採用されているが、今後の動向を慎重に見極めていきたい。

## 【分類の有用性】

花菖蒲界が追い求める花菖蒲文化は、系統保存にスポットを当て続けることによって、その維持発展が促されることは言うに及ばない。しかし、一方において国際的な視野も必要となっている。花菖蒲文化を絶やさないためには、ある程度は現代人好みの品種を作って、それを大衆に広く見せて普及させて行くことが必要であるが、実は花菖蒲育種家の絶対数では米国が圧倒している。彼らの育種品種は大変に丈夫で、色彩鮮明な点は現代日本の若い世代好みでさえある。服飾やポスター、ゲーム等から影響される色彩感覚は汎世界化が進んでおり、古品種に見られる鈍い色彩は余りにも暗いという年配者もいる。下手をすると将来の花菖蒲園を彩る花菖蒲品種は米国育種品種が独占してしまうという可能性さえ感じられる。実際に、日本原産植物であるギボシやキスゲ類では、既にそのようになってしまっている。

日本独自の花菖蒲文化継承のためには、古品種の単なる保存では、もはや不十分である。各系統の特長となっている花卉や雌しべの特性を数段階に分け整理・保存し、その育種背景となった文化を考えて行く姿勢が大切である。協会による具体的施策としては、より分析的な眼を持って品種評価や審査基準を作成して行くことであろう。

## 2013年 花菖蒲の園芸改良品種の分類表

1. 下表は主として育種の歴史（系統成立）及び花型（外部形態）に基づく園芸分類である。
2. 系統は肥後系、伊勢系、江戸系、長井系、外国種、種内交配種、種間交配種の7種類とする。
3. 戦前品種は系統内交配であったが、戦後品種の多くは系統間交配品種で構成されている。  
 系統間交配や交配親不明を問わず、一定の既存系統に近似した特性を持つものはその該当する系統に分類する。
4. 系統間交配や交配親不明を問わず、何れの系統にも似ていないものは種内交配種とする。
5. 将来的には系統内・系統間交配と同様に、種内・種間交配の区分が難しくなっていく可能性がある。
6. 育種家名等を使用した〇〇型とは、概ね十数品種以上が現存し一定の品種群を形成しているものとする。

系統名	本来特性	戦前品種群	戦後品種群
肥後系	草型：花茎僅かに葉上に抽出、時に分枝、葉幅広くやや垂れ葉 花型：六英を普通とし、三英、八重有り、花径は巨大性を有する。 花被：外花被大きく開展、内花被緩く立上る。薬片も大型で立つ。 花色：本来は紫・紅紫・白色が主、現在は他の色彩配色が加わる。 花期：六月中旬からの晩生多い 草勢：中位で繁殖力がやや弱い。	熊本花菖蒲 (肥後古花) 西田衆芳園 型	光田型 平尾型 加茂花菖蒲 園型
伊勢系	草型：花茎と葉長ほぼ等しく分枝せず。葉幅やや狭く直葉が多い。 花型：三英を本来とする。花径中位 花被：外花被は縮緬地薄弁で垂下、内花被抱立つ。薬片は鶏冠状 花色：淡色鮮明なものが多い。 花期：六月上旬から始まり下旬まで。 草勢：やや弱い。	松阪花菖蒲 (伊勢古花)	富野型 前田型 加茂花菖蒲 園型
江戸系	草型：花茎は葉上に出、枝咲性種あり。葉性は硬直で直葉が多い。 花型：三英、六英、八重咲、玉咲等変化し、花径も大小種々あり。 花被：外花被は横開張。内外花被共に一定型がない。薬片は中位 花色：花色、配色共に変化に富む。 花期：極早咲きは5月下旬から。他は六月上旬から下旬にわたる。 草勢：強健	江戸花菖蒲 (江戸古花) 大船型(神 奈川農試)	伊藤型 吉江型 平尾型 加茂花菖蒲 園型
長井系	草型：花茎は細く葉上に超出、分枝性に富む。葉性やや細い。 花型：三英を本来とする。花径は江戸系とハナショウブの中間となる。 花被：硬弁の平咲かやや垂下、花弁同士は重ならない。 花色：花色、配色共に変化に富む 花期：六月中旬(多花性のため長期) 草勢：分けつ良く、強健	長井古種	長井あやめ 公園型 加茂花菖蒲 園型
外国系	形態的には江戸系だが、文化的背景が異なるため外国系とした。 強健で色彩鮮明なものが多い。(カタカナ書きにて表記)		ペーン型 四倍体型
種内交配種	形態上どの系統にも分類できない系統間交配や交配親不明種		佐藤型
種間交配種	花菖蒲と近縁種との交配種。草型、花型、花被、花期は両親の中間型となる。花色：キショウブとの交配種は変化に富む。		キハナショウブ型 カイツハショウブ型